

8.0 退職にあたって

退職にあたって

進化系統研究部門 進化形態分野・濱田 穰

私は1995年3月に霊長類研究所に赴任し、26年1月、職を務めた。霊長類研究所には、それより前から大学院生として、籍をおいた。霊長類研究所に大学院が設置されたのは私の入学した6年前のことで、私が入学した時には初代院生もいらっしやった。ストーミングを受けた。霊長類研究とは何か？ウマ、シカ研究をしたいんなら、他所へ行きな；人間性の進化過程・メカニズムの解明を目的とする研究をしると。

大学院で私は非ヒト霊長類（NHP）の生後成長をテーマにした。S. J. Gouldの『個体発生と系統発生』という本に影響を受けていた私は、マカクの身体成長をテーマにした。出生前の個体発生過程にもヒト化はあるだろうが、近縁のもの比較では、ヒトの特徴は発生過程の後のほうで現れるだろうと。

成長・発達で注目されるのは、幼児期と思春期である。幼児期の成長ではA. Portmanの「生理的早産」仮説があり、思春期成長では、形質人類学者（J. M. Tanner や B. Bogin）はヒト特有の思春期成長加速があり、「思春期」そのものもヒト特有の成長期だと主張があった（ある）。またヒトを特徴づけるものとして、A. H. Schultzは歯の萌出順には“原始的な”分類群から“進歩した”分類群へと、大臼歯の萌出が段階的に遅くなるという傾向（Schultz's rule）がある。マカクとチンパンジーを対象として、これらに挑戦した。

このような研究ができたのは、研究基盤が整備されていた、そして整備が進められているからである。まず設備・機器では、私のキャリアの間に著しい新規性が導入された。大学院生のころに出始めたマイコンと2次元座標測定器（ディジタイザ）を研究室で導入していただいた。そのころ研究所にPDP-XIというワークステーションが導入された。職についてから、CアームX線装置・2波長X線吸収測定器（DXA）・末梢部定量的X線コンピュータ断層撮影装置（pQCT）を導入した。また研究所としてCT、MRIも導入された。電話回線でデータのやり取りしていたのが、インターネット環境も整備され、大量のデータが瞬時にやり取りできるようになった。

研究対象は、霊長類研究所はもとより、多種NHPを日本モンキーセンター、コドモから成体のチンパンジーを三和化学研究所（当時）、新生児から超高齢までのカニクイザルを筑波医学霊長類研究センターでアクセスすることができた。とりわけ新生児から高齢までのチンパンジー研究できたことは幸運であった。フィールド調査は、国内では北は下北から、南は屋久島まで、そして海外ではアジア諸国、アフリカ諸国へ行かせてもらった。

霊長類研究所の実験動物は、私が大学院生のころには、実験室で飼育され、その健康管理も研究者まかせであった。私もマカクの赤ん坊を本棟3階の実験室で飼育（哺育）していた。これがサル施設=人類進化モデル研究センターによる、飼育施設での飼育・管理となり、質の良い対象が提供されるようになった。実験補助に関しても整備された。部門（分野）配属の技官（技術職員）があったが、定員削減された、代わりに技術部が充実し、さまざまなサービスが提供されるようになり、恩恵にあずかることができた。霊長類研究所の他分野の研究者との交流はひじょうに有益であった。最後に研究発表の場であるが、まず日本モンキーセンターのプリマーテス研究会がある。そして日本霊長類学会が（1985年）、設立されその大会ができた。また国際霊長類学会大会が1990年と2010年に日本で開催された。私はアジアの霊長類研究者とともに、アジア霊長類シンポジウム(Asian Primate Symposium, APS)を催している。第一回は2005年にBangkok (Thailand) で International Symposium of Southeast Asian Primatesとして、それからほぼ二年おきに、第七回2020年に Assam (India) で APS、および Kathmandu (Nepal) での Satellite Symposium までである（次回のシンポジウムも計画されている）。